

---

# 月華闘士～此れと決めた者～

天桜 紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月華闘士～此れと決めた者～

### 【NZコード】

N24190

### 【作者名】

天桜 紫

### 【あらすじ】

此処京都には、とある一つの言い伝えがある。

それは、かぐや姫がいた時代、かぐや姫を月に返す代償として、護衛として働いていた『月の人』が、数名地上に残つたというもの。そしてその『月の人』は、直接殺される事がなければ、永久に生き続けるという。

此の物語は、そんな月の人達と、此の時代の侍達、町娘を描いた、切なく残酷で、時として幸せな、複雑な愛と葛藤を描いた物語です。もしあなたら、此の時代をどう生きる?

俺は、女であり、男である。

かつて、私は女として、男に本気になつた事が、たつた一度だけある。

私は、その男の前から唐突に消えた。

何故なら、『俺』としての使命が残つていると、知つたからだ。

無論、『彼』には、何も言わなかつた。

何故なら『彼』が、『地上の人』だつたからだ。

「あ～い、とつとと食つて行くぞ。」と、今日も明るく、橋の上で手を振る東を見て、「お前に飯を合わせていたら、飯を味わえないだろう。」と、団子の最後の一囗を口に入れながら、鏡夜は言う。すると、東は、「んなところで、お前の小さな声で言われても、流石の俺でも、何て言つてゐのかわかんねえよ。」と独り、叫んでいた。私と鏡夜は、茶屋の表の椅子に腰掛けて、団子と茶を食べていたのだが、女将に別れを告げ、北東の方角にある橋の上で、一人手を振る東に向かい歩き出した。

「遅えよ」と、一人ふてくされている東を他所に鏡夜は、「例の、土佐の坂本という男の話だが……。」と、私に話しかけてきた。

俺は、奴の言う事も一理あると思う。人斬りをなくそうという点は、賛同すべきだと思うし、今の幕府のやり方が気に入らんという点でも意見が一致している。だから俺は、此の件は賛成だ。「私が意見を述べようとした時、ふてくされていた東が、「けど、俺は、内輪揉めしてる奴等も嫌いだな。それに、幕府の奴等には、散々、面倒見てもらつたつてのに、今更裏切れつかよ。なあ？紫癒。」「そう私に同意を求めてきた。

確かに、私達は、地上に来たばかりの頃、身分を隠し、幕府で下女、下男として働いていた。「それは、身分を隠していたからこそのも

のだ。」と、鏡夜が冷静に言うのを見て私は、その事を自分に言い聞かせた。そして、「その事については、鏡夜に同意する。」と、私は言った。「では、例の件については？」と、透かさず鏡夜は言った。

「……私は、……贊同出来ない。」私は、俯きがちに答えた。「それは、……武年前、お前に、共に所帯を持ちたいと言った、例の武士が原因か？」と、先程より明らかに低い声で鏡夜は言った。「それは、……わからない。」そう答えた私に東は、「まあ、確かに面は良かつたけどよ。地上の奴等じゃあ……なあ？」と、実に困った顔をしていた。「確かに、俺達は、月の光を壱ヶ月浴びなければ、直接殺されさえしなければ、地上でも生きていける。そして、時が経つに連れて、自身が地上人ではないという意識を失いがちになる。それに俺達は、定期的に住む所を変えているからな。余計失いやすい。」そう鏡夜は、口にした。「もうすぐ地上に来て捌百年かい。長いな……。」東は、まるで独り言のように呟いた。「けど、彼奴が捌百年間で、壱番良い男だった。」そう呟いた私に、「その成りで泣くな。」と、鏡夜は言った。そう私は生物学上は女であるが、武士の成りをして、男として、基本的には生活している。けれど、彼は初めて初見で、男装の私を見て、女だと気付いたのだった。二人と歩きながら、私は、彼と初めて出逢った時の事を、思い出していた。

ある秋の夜遅く、確か猪の刻位に、私はなかなか寝付けないが為に、京の町をぶらぶらと、一人男装で歩いていた。

すると、脇道から、酔った侍が浪士がぞろぞろと出て來たのだ。私は刀に手を当て、何時でも抜ける様にして、角で建物に隠れていった。

そして、案の定、奴等は私に話しかけてきた。「ん?なんだ小僧生意氣な目をしあつてからに。へつ。」「そうだぞ。俺達あ、御侍様なんだぞ。偉いんだ。はつ！」と。

その隙を見て、私は、「はつ。」と、小さな声で気合いを入れた。  
そして私は、ざっと見て参拾はいるであろう不逞浪士等を、いつも通り、僅か拾秒程度で斬つた。

私達参人は、かぐや姫の護衛として、約百年程御仕えしていたが、ある時、姫様が地上から帰つてくる代償として、私達参人は、かぐや姫最強護衛部隊参人集として、地上に残る事となつた。

自慢ではないが、私達参人は強い。そして、他の式人曰く、参人の中で私は圧倒的な強さを誇つてゐる…らしいのだ。だから、私にとつて、あんな数の不逞浪士程度、何て事無かつたのだが……、

「いやあ、凄いね、君。」と言つ男と、ただ黙つたまま、軽く私を睨み付ける男が、歩きながら近付いて來た。

「凄いと思わない？左之さん。彼、僕が眼を擦つてる間に、彼等全員倒しちゃつたんだよ。早い早い。」と、一人は興奮した様子で、微笑みながら言つた。するともう一人は、「否、そりやあ、まあ、確かに凄いが…。…こいつ女だろ？」と、彼はもう一人に尋ねた。私は、此の事に毫畠驚いた。私を一瞬で、女だと見抜いた人間等、此の約捌百年間一人もいなかつたのだから。

私は彼を、強く睨み付けた。

すると、彼は、「無理すんなよ。」と言つて、私の頭を撫でた。

「…」其の瞬間、私の目から白い液体が、頬を伝い、地面に落ちた。

そんな私を見て彼は、「おいおい、何をそんなに驚いてんだ?自分で斬つたんだろうが。」私の顔を除き込みながら、彼は不思議そうに言つた。

其の言葉を聞き、馬鹿にされた様な気分がした私は、「其の事に驚いているのでない。瞳から白い液体が、流れ出ている事に驚いているんだ。」

そう、彼を睨み付けながら言つた。

「はあ?…ふつ、そりやあ、涙つて言つんだよ。お嬢さん。」と言つて、私の頭から手を話し、一人不逞浪士の遺体を、見舞わつている男の元へと歩み寄つた。

「で、遺体の状態は?」と、彼はもう一人の男に聞いた。

「いやあ、見事なもんだよ。どれも此れも、急所をバツサリ。」と、もう一人の男はさっぱりした表情で言つた。

「ねえ、『彼』新撰組に入隊させようよ。どうせ隊士は多いに越し事ないんだし。其れに、此れだけ早く、的確に殺れる隊士なかなかないよ。」と、上機嫌で言うもう一人の男を見ながら、彼は、俯きがちに、「おい総司、そりや、男だつたら俺も贊同してえところだが、こいつは女だ。土方さんにでも、ばれてみろ。」と言つた。「でも、僕、どう見ても『彼』は『彼』にしか見えないんですよねえ。」と、おどけた様に言つた後、総司という隊士は、「君、もしかして、もう何処かに入つてたりする?例えば、会津とかさ。」と、興味津々な様子で聞いてくる総司に対して私は、「私には、其の様

な者達と馴れ合つ趣味等ない。」と語つて、後ろを向き、其の場を立ち去つとした。

が、其の時、強い力で左腕を捕まれ、「で、君、名前は?」としなかつたつて!」と、其の様子を見ていた彼が、驚き慌て出した。「ふふつ、左之さん。僕は本氣ですよ。だつて、なかなか居ないじゃないですか。あの人数を、あれだけの速さで斬つておきながら、涙を流して、しかも、其の涙を知らないで涙に驚く子なんて。それに、彼女、さつきから僕等の事ちつとも恐がらないし。…其れにつきの、……涙に驚く前の泣き顔、凄く可愛かつたですしね。」そう言いながら、総司は私にウインクをした。

けれども、普段、男同然の生活をしている私は、何も感じないどころか、こ奴の頭は大丈夫なのだろうかと、危うく心配仕掛けた。「で、教えてくれるんだよね?」と、総司は、再び満足の笑みで私に聞いてきた。

「離したら教える。」と言つて、私は総司を睨み付けた。すると総司の後ろから、右頬を搔きながら、少し照れた様子で、「教えてやつてくれねえか。」と、彼は言つた。

「やっぱり気になるんじやない。左之さんも。」と、総司はニヤツと笑いながら、言つた。

「……うつ、うるせえよ。」そう言つた彼を見て、思わず、私の口元が緩んだ。

その瞬間、武人の動きが静止していた。

「ふつ、……俺の名前は、紫癒だ。…月詠 紫癒。此れで良いか?」

そう言う私を前に武人は、何も言わなかつた為、私は、後ろを向き、其の場からさつと立ち去つた。

俺と総司は、『月詠 紫癒』と、名乗った女が去った後も、式人して、暫く其の場に固まっていた。

正直、初め俺は、俺に対してもガンを飛ばしてきたあの女に、苛ついた。

女にガンを飛ばされたのを初めてだつた。男なら慣れているものを。

とすら、思つていた。

だけど、嗚呼も表情がころころと変わるもんなのか。

人を斬つた後の、あの冷静な顔、あの愛らしい泣き顔、あの涙に驚いた時の、両目を満丸くした少し可笑しな顔、

そして、極めつけは……

…あの小柄な容姿を、思い切り抱き締めたくなる様な、愛らしい笑顔。

一体、何だつてんだ。動機が止まらねえ。其れに身体中が、火照る様に熱い。俺があのガン飛ばし女に惚れただと。有り得ねえ。いくら何でも、あんな、男みてな女なんかに。

俺は、そう思いつつも、あの笑顔が眼に焼き付いて、どうしても、忘れられなかつた。

僕が、我に帰つて、左之さんを見た時、左之さんは、今迄見た事も無いくらい頬が赤かつた。

其の時、僕は、直感的に感じた。

左之さんは、お紫癒ちゃんに惚れている。間違いない。

とこう事は、僕は、左之さんと、戦わなければならぬといふ事だ。

…まさか、あんなに可愛くて、愛らしい笑い方をするなんて、考  
てもみなかつたな。  
…でも、僕だつて…。

絶対に負けないからね。…左之さん。  
と、心の中で呟いた。

そして、見廻りの帰り道も、僕等は、お互に、壱言も、言葉を交  
わす事なく、屯所へと、帰つて行つた。

私は、原田左之助、沖田総司両名と出逢つた、其の次の夜も、  
また宿を抜け出し、昨夜、酔っ払いの出た所に向かう途中にある、  
『神金川』と呼ばれる川の上に架かる『神金橋』で壱人、風を浴び  
ていた。

そして、私は、壱人の人影が、私に近づいて来るのを感じた。

「つたく、お前、本当に女か。」と、其の人影は溜め息混じりに聞  
いてきた。

「原田…」私は、ただ壱言、そう言った。

「なんだよ。そりやあ、いくら何でもねえだろ。苗字に呼び捨てつ  
て。」と、彼は、怒った様子で言つた。

そして私は、「じゃあ、何と呼べば良い。原田左之助か?」そう聞  
いた。

「だから、あるだろもつと、色々とさ。」と、彼は呆れた様子で答  
えた。

私は、頭の中を色々と張り巡らせたが……、

「…すまない。其の式つ以外、思い浮かばん。」「あんなな。」そ  
う、心の底から呆れた様に、私の隣に、橋に腕を掛け、彼は言つた。  
そして其の後、暫くの間沈黙が続いた。

そして、「なあ、夜中に壱人で出歩くの、家の人とかは、何も言

わねえのか。」 そう何処か寂しげに、彼は聞いてきた。

「否、私が身内では壱番強いからな。其れに、私の壱族は、内輪揉めは絶対にしないからな。」 そう私がはつきり物を言つたのを見て、彼は、

「今日は会話してくれるみてえだな。」 と、言つてはにかんだ。

「壱族の慣わしに、乗つ取つただけだ。」 と、私が言つと、「そつか。」 と、短く咳いて、私の格好を見てから、

「寒くねえのか？」 と、心配した面持ちで、彼は私に聞いてきた。私自身、鏡夜と東以外に心配など、ろくにされた事が無かつた為、どうして良いのかわからぬ半面、昨日も確かに心配されたよな？ という気持ちもあり、ただただ私は、何も言わず、壱人考えていた。すると突然、背中から、温かい人の体温が伝わってきた。慌てて後ろを振り返つて見ると、彼が私を、背後から軽く抱き締めていた。

「…………。」 どうしたらしいのか解らず私が、何も言えずにいる

と、頭の上から、

「温けえだろ。」 と、優しい声で彼は言つた。

私は初めての経験だった為に、全く、何も解らないまま、ただ黙つて頷いた。

俺は、今夜は非番だつたけれど、昨日会つた、あの女の事が気になつて、仕方がなつた。そして、其のせいでなかなか寝付けず、俺は、昨日あの女と会つた場所へと向かつた。けれど、其の道中、俺は、昨日と同じ人影を見かけた。あの女は、壱人橋に腕を掛け、夜風に当たつっていた。其の様子を見て、思わず俺は、また数秒見とれた。

そして、

「つたく、お前、本当に女か。」 と、お紫癒に聞いていた。

するどお紫癒は振り返つて、

「原田…」 と言つた。

「なんだよ、そりやあ、いくら何でもねえだろ。苗字に呼び捨てつて。」俺は、他の隊士達に呼び捨てにされるのは、年がら年中だったが、女に呼び捨てにされたのは、初めてだった。

するとお紫癒は、

「じゃあ、何と呼べば良い。原田左之助か？」そう真顔で聞いてきた。

俺は、其の答えに苛ついた。

何故だかは知らねえが、俺は、こいつにだけは、呼び捨てにされるのは、『ゼットえ嫌だ。』と、感じた。

「だから、あるだろもっと、色々とさ。」と、彼が言うと、お紫癒は、色々と考えている様子だったが、其れもまずおかしいだろうと、言いたい気持ちを俺は抑えた。だつて、昨日あいつ等をあの速さで斬つっていた奴が、こんな事で考えを巡らせているなんてよ。

俺の中で、おかしさが苛々を抜いた。

「…すまない。其の式つ以外、思い浮かばん。」そう、本当に申し訳なさそうに言つお紫癒を見て俺は、「あんな。」そう、心の底から呆れた。そして、俺はお紫癒の隣で、橋に腕を掛けた。そして其の後、暫くの間沈黙が続いた。

そして、「なあ、夜中に壱人で出歩くの、家人の人とかは、何も言わねえのか。」と、俺が聞いてみると、

「否、私が身内では壱番強いからな。其れに、私の壱族は、内輪揉めは絶対にしないからな。」

という、不思議な回答が返つてきた。お紫癒が壱番強いのは未だしも、内輪揉めは絶対にしないってのは何の事だ？俺達新撰組が内輪揉めしているとでも言いたいのだろうか。そんな事を考えていると、俺は、昨日と違い今日は、お紫癒がしつかりと会話をしてくれている事に気が付いた。

「今日は会話してくれるみてえだな。」と、はにかみがちに俺が聞くと、「壱族の慣わしに、乗つ取つただけだ。」と、お紫癒は何で

もない事の様に答えた。

「そうか。」と、俺は短く呟いただけだが、先ほどからの、『  
身内』そして、『壱族』という言葉が俺は気になっていた。  
やはり、何処かの密偵か何かなのだろうか。そんな事を考えている  
と、ふと、俺は、お紫癒が薄着な事に気が付いた。

「寒くねえのか?」と、聞いてやると、何やら不思議そうな顔で此  
方を見てきた。俺は、羽織物を持つていなかつた事に気付き、仕方  
なく、後ろから抱き締めてやつたつもりだったが、抱き締めた事に  
気付くと、慌てて後ろを振り返り、俺の顔を見て俯き、黙り込んだ。  
少しして、沈黙に耐えきれなくなつた俺が、

「温けえだろ。」と、言つと、頬を淡い桃色に染めたまま、何も言  
わず、ただ黙つたまま、お紫癒は頷いた。

そんなお紫癒を見て、俺は、抱き締めている力を、ほんの少しだ  
け強めた。

彼、原田左之助に神金橋で抱き締められてからというもの、私は何だか落ち着かない気持ちでいた。

彼が、私が寒そうだと思い、羽織物を持っていなかつたが為に、あのような結果に至つたのは、私自身よく解つている。

そして、あの様な状態で約拾分程過ごしていいたという事も後で、宿の時計と、己の感覚で知つた。けれど、其れは、私が彼を忘れられない理由として、成立等しない。何故氣になる？…何故だ。

俺は、槍を研ぎながら、お紫癒の事を考えていた。

何故、女のくせに武士として生きているのか。壱族とは何の壱族なのか。……考へても、勿論、答へは出ない。

そんな時、新ハが俺の部屋へとやつて來た。

「よつ！今日も又、寒いな。」と、言いながら、畳で壱人槍を研ぐ、俺の隣に座した。

「嗚呼。」

「なんだか最近、元気がねえんじやねえのか。左之。」と、右手で頭を搔きながら新ハは言つた。

「そんな事はねえが…。」と、言いながらも、俺は内心、新ハには言つべきかと悩んだ。

「他の奴等に聞いたりよ。総司が恋煩いじやねえか、なんて言つもんだからよ。」そう言つた新ハに、俺は返す言葉がなかつた。

そんな俺を見かねてか新八は、「もし、…言いたくなぁってんなら、俺も無理にとは、言わねえけどよ。」と、苦しそうに言った。

「否、いいんだ。」

そう言つてから、新八にお紫癒との事を話した。

すると新八は、

「…なあ、左之。…お前、其のお紫癒つて女に惚れてんだよな？其の、最初に会つた時の、泣き顔とか、笑つた顔とかによ。」と、俺に確認する様に聞いてきた。

「…嗚呼、多分…。」

俺は、此の日、自分で口にして、初めて、俺がお紫癒に惚れている事を完全に自覚した。

と言つても、初めて会つた時から、薄々気付いてはいたのだが。

新八が、部屋を出て行つた直後、「やつぱり新八さんには、素直なんですね。」と、言いながら、総司が俺の部屋へと入つて来た。「残念な結果ではありましたけど、僕も負けないんで、じゃ。」と壱言、言つて、右手を顔の横に上げて、部屋を出るかと思いつや、後ろを向いた瞬間、「彼女の壱族は月の壱族だよ。」と、言われ俺は、総司の腕を掴んだ。「何だつて、そんな事、お前が知つてんだ。」そう言つ俺を見て、「彼女の事が好きだから。自分で調べたんだよ。僕が調べたところ、彼女の年齢は約捌百歳。今迄、付き合った男は略零に等しい。其れと、式人の仲間がいて、此の式人は、式人とも男。」そう、笑顔で言い切つた総司を見て、「…捌百歳だと。…そんな事……。」

「残念だけど、彼女とお仲間の式人が約捌百年前に、かぐや姫を月に返す為に地上に残つたつていう、伝説の月華闘士だつて事は、間違いないよ。其れに、月の人は、直接的な衝撃が身体に及ばない限り、永遠に生き続けるつて言つじやないですか。何より、彼女の強

さからいって、考えられるのは此の位だよ。」総司は、呆然とする俺を見たまま、続けた。

「此の事を知つても、まだ、彼女の事好きでいられる？あんなに可愛く笑うのに、付き合つた男が零なのはわ。多分、此のせいだよ。……もう放してくれてもいいんじやない？」そう言つ総司に俺は、「あいつの今いる場所は何処だ。」と、聞いた。「ふつ、神金橋を越えた所にある朱色の屋根の『光和堂』つて宿屋だよ。」と、総司は笑いながら言った。

俺は其の後、光和堂に向かつて走つた。

## 第五章

私が、宿の部屋で壱人、緑茶を飲んでいると、やたらと宿屋の中が騒がしくなった。

すると、私の部屋に東がやって来て、

「今日から来た団体客だとよ。はああ～、寝みいな。」そう言つて、私の部屋に寝転がつた。

「其れなら、自分の部屋に行けば良いだろう。布団も、ちゃんと武組あるはずだが。」そう言う私を他所に、本格的に寝息を起て始めた。刀を横で拭つているというのに、よく寝られるものだと思ひながらも、私は、東を起こさずいたら、

「甘やかすところくな事にならぬ。特に東の様な者は。」と、言いながら、鏡夜も私の部屋へと入つて來た。そして、

「つい先日、此の近くで約参拾人程の酔っ払つた浪士が、全員斬られた。」と、私に言つてきた。「其れで?」と、刀を見ながら言った私に対し、「其の頃、新撰組が、夜の見廻りとやらをしていたらしい。」と、鏡夜は続けて言つた。

「何が言いたい。」そう睨み付けた私に対して、鏡夜は、「新撰組に斬られぬ様、用心しろと言つてゐる。」と、睨み返された。

「俺が負けるつて、意味じゃないんだろう。……怪しまれるなどいう意味か。」と返すと、「当たり前だ。」と冷静に返された。

… そう、私達は、お互いに、自分が壱番大事な、参入集なのだ…。

東を残し、紫癒の部屋を出た俺は、壱人、小さな声で呟いた。

「…此れでいい。……恋心は我等を狂わせ、接吻は我等を人に変える。」

… そう、其れは我等の者の秘密。

何があらうと、紫癒と東には教えてはならない。

姫様が、此の俺に託された秘密。……是が非でも守らねば。

俺は、冷たい秋風が吹く中、壱人、光和堂へと辿り着いた。  
団体客なのだろう、入口はとてもじゃないが、入れる雰囲気ではなかつた為、俺は裏口から宿内に入つた。

其の時、中庭に出て来る壱つの人影が見えた。  
其の人影は、紛れもなくお紫癒だつた。

「紅葉が綺麗だな。」

そう、壱人呟いたお紫癒に、俺は話しかけようとした。  
けれど、壱度躊躇い、先に、考えを纏める事にした。

先日の不逞浪士の件は、俺と総司が御用改めをした事になつていて  
から、問題はない。新八も問題なく、黙つてくれるだろう。

……しかし、お紫癒が月の者だと？

本当にそつたうか……。

けれど、不思議と俺は、お紫癒が月の者といつのは、本當だと、心  
の何処かで確信していた。

だから、お紫癒が自分から、言い出さない限り、知らない振りをし  
ようと思つた。

そう、あいつの言葉で、あいつが言わなければ、意味がない事だと、  
俺は思つた。

そして、俺が考えを纏め終え、話しかけようとした時、奥から

壱人、男が現れた。

背は俺より少し低く、年の頃は、俺とあまり変わらないあらう男  
が、

「寒くねえの？あんまり勝手すると、鏡夜にまた何か言われるだろ。

「そう言つ男にお紫癒は、「東、俺は鏡夜の家来じやないんだ。お前も鏡夜の家来じやない。」と、冷静に返した。

「新撰組の事は… も。鏡夜なりに色々考えて言つたんだと思つぜ。」

確かに鏡夜の言い方は、どうかと思つけど、実際、悪気はないと思うぜ。」と、男が言つたのを聞いて、俺は、嫌な汗をかいた。

「話した事も無い奴等の事を、悪い奴等だと決めつける。…あの考えが俺には解せないんだ。」

そう真剣な表情で話すお紫癒の顔を見て、俺の額を流れる嫌な汗は止まつた。

「けど、此の前は、其の考えもやむを得ないだらつて、言つてたじゃねえか。」

「あの時は、……ああ言つ様に、鏡夜に頼まれたんだ。冠檸とかいう娘がいたら？あの娘を諦めさせる為とか何とか。で、其れに協力してくれって言われて。」

「ん？何だそれ？其れじやまるで、あの冠檸つて女がお前に惚れてたみてえじやねえか。」

「…だよな。でもいくら成りは男でも、中身は女だ、俺は。」

「…まあ、冠檸つて奴も、最近は現れなくなつたし。いいじゃねえか。な！」男はそう言つて、宿の中へと壱人、入つて行つた。

男が中に入ったのを確認してから、俺は、『冠檸』という奴との事を聞こうと、お紫癒に話し掛けた。

「よつ！お紫癒、元氣にしてたか。」そう言ひながら草影から入つて来た俺を見て、

「嗚呼、…其の…、お紫癒つていうのは、初めてだ。」と照れた様に言つた。

俺は、静止しそうになつたのを抑えて、「さつきの話してた奴つて、

…お前の身内か？」と、聞いた。

「嗚呼、兄の様であり、弟の様なものだ。」 そう冷静な表情に戻つて言つた。

「 そりか。……偶然聞こえたんだが、「冠檸つてのは……。否、言いたくねえ様ならいいんだ。無理にとは言わねえ。」

そう言つ俺を前にお紫癒は、「『米沢屋』つて酒屋の娘だ。もう壹人の兄の様な奴の事を、大分好いていたんだが、…弐ヶ月程前に、そいつが振つたんだ。其の酒屋の娘をな。」俺の顔が、余程気にしている様に見えたのか、お紫癒は、

「何で顔するんだ。気にしないでくれ。身内の色恋沙汰だ、原田。」 そう言つて、俺の右頬を撫でて、笑つた。

少しして、お紫癒は、俺の頬から手を離し、

「またな。」と微笑みながら言い、宿の中へと、戻つて行つた。

俺は、其の姿が見えなくなる迄、お紫癒の笑顔に見とれていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2419o/>

月華闘士～此れと決めた者～

2010年10月20日12時00分発行